

貝がらの町

声なき人びとの出会い

小林 トミ



思想の科学社

貝がらの町

声なき人びととの出会い

小林トミ

目次

同窓会	7
貝がらの町	25
一	26
二	43
三	52
四	59
一年四組	63
一	64
二	78
サーカス	87
サーカス	88
商売繁昌	92
やきいもや	94
少年タイガー	97
銭湯	101
活動写真	106

吉田屋……………111

六平太周辺

笛太郎一家……………116

丑吉一家……………128

大山親分……………132

彦左衛門……………138

六平太……………142

なおしや……………148

きく子とお婆さん……………153

木工や……………161

淋しい人たち

増なあこ……………166

ひとり芝居……………168

おりん……………177

おさんばあ……………185

七味唐辛子やの男……………193

和なあこ……………201

丸まげおばさん……………206

おらとも反対……………211

声なき人びととの出会い……………215

変人、奇人について……………216

政治は私の身近なところにあった……………219

声なき声の若者たち……………235

バイド・パイパー・ハウス 自分たちの会社……………246

色あせた旗……………259

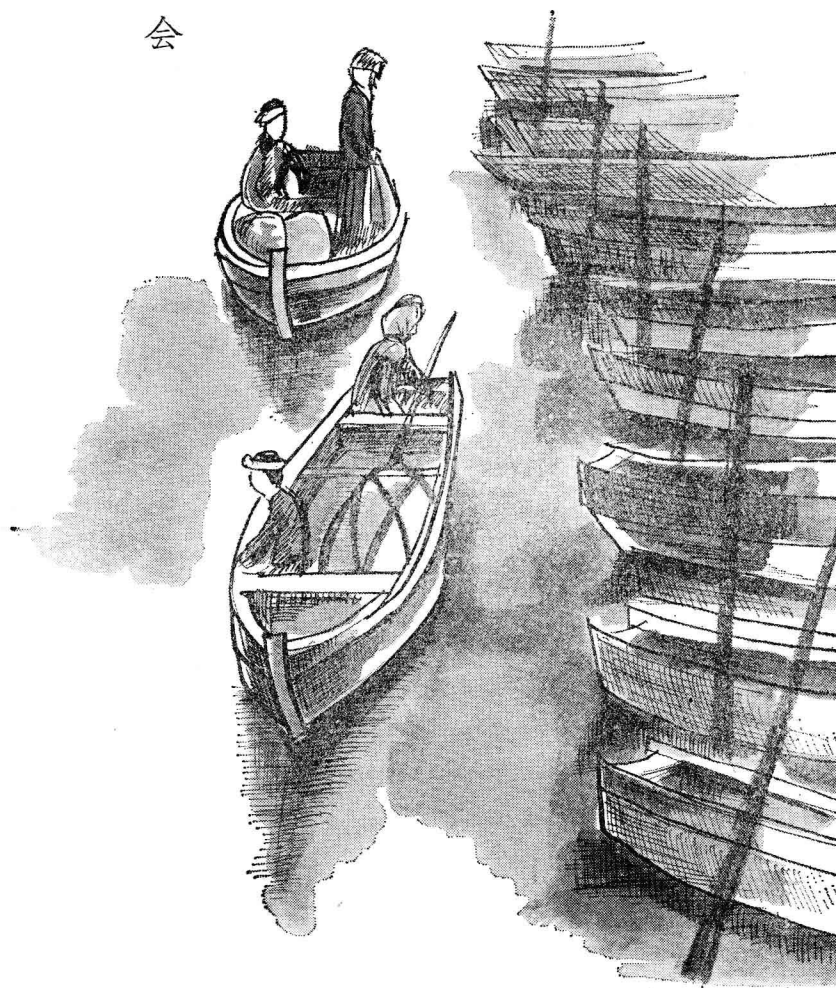
「声なき声の会」二十年……………263

あとがき……………268

貝がらの町

声なき人びととの出会い

同窓会



ある年の夏の終わり、一人の男がなみ子をたずねてきた。

玄関にでてみると、どこか、見たことのある顔である。誰だったかなと考えていると、「私のこと、わかりますか」と彼は笑いかけた。なみ子は、あわてて記憶をたどってみた。だが、どうしてもわからない。

でも、たしかにどこかで会ったような気がする。

男は笑いながら、「わかんないかな。山田ですよ」といった。

残念ながら、思い出せない。

「ほら、小学校のとき、一緒だった山田孝ですよ」

というので、驚いてみると、まぎれもなく、山田孝であった。小学校の一年四組の友人で、みそっばの可愛らしい少年だったが、やはり、どこかに、その面影がのこっていた。

彼は証券会社に勤めているといって、名刺を出した。証券会社の課長をしているらしい。小学校時代、成績がよく、彼が地元の中学校の教師をしていた頃に、会ったことがあった。そのとき、地方新聞に小説を書いているということを話してくれたが、考えてみると大変になつかしい人物であった。

彼はゆったりとした調子で、小学校以来、相当に長い時間がたったので、一年四組の同窓会をひらきたいので、やっと住所をさがしてたずねてきたというのだ。

小学校一年生といえば、もう大分、前のことである。

頭のなかをさまざまなが、かけめぐり、なみ子は小学校時代の友だちのことをいろいろときいてみた。なつかしい友だちの名前が話題にのぼった。

原田先生は相変らず元気で、すでにお孫さんまでいるという。それに絹代と次郎は結婚し、中学校の近くに文房具屋をひらき、子どもは大きくなっていることや、竹雄は小学校の近くで佃煮屋をやっているという。それに、漁師をしているサビという仇名の男は、相変らず浜にいつているという消息をきかされた。

小学校を卒業してから、もうかなり、長い歳月が過ぎていた。

なみ子は貝がらの町を出てから、ずっと学校にゆき、あとはそのまま、変化のない生き方をしてきたせいか、小学校時代の友人たちの生き方は、どこか、どっしりと根をはやしているように思えて、圧倒された。それに、目の前に坐っている山田は、いかにも、職場でも、敏腕な証券マンらしく、貫禄があった。

彼は、最近、同窓会をひらきたいと思っていたところ、新聞でなみ子加わっている市民運動の記事を読み、大変になつかしく思い、住所を新聞社に問いあわせてわかったので、直接、たずねてきたのだということ話を話してくれた。

だが、なみ子は複雑な気持ちになっていた。久し振りに小学校時代の友だちに会ってみたいという気持ちと、何らなすことなくすぎた歳月についての後悔が先にたち、あまり、会いたくないという気持ちがあった。

貝がらの町ですごした年月は、善いにつけ、悪しきにつけ、なみ子の生き方に大きな影響を与えて

いる。そのために、たまらないほどの重さが、なみ子にあった。

山田孝は、これから、みんなをさそうので、十月二十二日の日をあけておいてほしいといって帰っていった。

なみ子は、なんとなく、気がすまない。

なみ子はいろいろ考えたすえに、やはり、同窓会に出席することにした。友だちに会いたいという気持のある一方でその会のなかで浮いてしまうであろう自分を想像して、気が重かった。

当日は、どんよりとした天気であった。

なみ子は緑色のワンピースをきて出かけた。何しろ、貝がらの町を訪れるのは、久しぶりであった。すでに東西線が通っていて、まるで、別の土地におりたつたようである。この町を離れて何年になるか……など、複雑な思いにとらわれていた。

駅のあるところは、昔、食品市場があったところだろうか。あの市場ができたときや、新しい橋ができたときは嬉しくて、何回も通ったものである。

まるつきり変ってしまった町並を歩きながら、なみ子は浦島太郎のような気分になる。とにかく、学校の通りに出ると、なんとなくわかるだろうと思った。随分、迷ったが、会場の寿司屋は、学校より、ずっと奥に入つたところにあり、なみ子が住んでいた家の横にある堰せきを埋め立てたところにあった。

店の横から二階にあがると、もう、大勢の人が集まって席についていた。なみ子はまわりをみまわ

すと正面には原田先生が坐っていて、山田孝が、「おーい、なみちゃん、先生の隣に坐んなよ」と声をかけてくれた。同級生たちは席についていたが、先生の隣の席はゆずりあって、あいていた。

原田先生は、昔のように、美しい面影のこっている。なんとなく、人間的な暖かさが感じられ、遠い昔を思い出した。

先生に挨拶をして坐ると、「やはり、出席してよかった」と思った。まわりを見渡したが、なつかしい顔ぶれをみても、誰が誰かもわからない。

やっと落ち着いてくると、隣に坐っているのは、幸子であることがわかった。幸子は、なかなかの消息通であり、会のあいだにいろいろな友人の消息を知ることができた。

今日の同窓会を欠席した多美代は、子どもの頃の希望通り、芸者から料亭の経営者になって、はぶりがよいということである。竹雄は、ムキ身屋の養子になり、いまは大きな佃煮屋を開いていること、駆け足が速かった照子は、十七歳で結婚したが、旦那が家出をしたまま行方不明なので、酒場に勤めているという。

「昨日ね、照ちゃんを誘いにいったんですよ。そしたらよ、『同窓会になんかいくのはいやだ』と洗濯しながらいったんですよ」

と幸子は不満らしくいった。昔は、運動神経が発達していて、いつも明るかったのに、この長い歳月は照子を大きく変えたのか。みんなに会いたくないという気持ちになっているのだろう。なみ子には何かわかるような気がした。

隣に坐っている原田先生は、小学生のときからきれいな先生に思っていたが、相変らずやさしく美しい。なみ子は先生と話しているうちに、後藤ミヨの消息を知りたいと思った。

「先生、ミヨちゃんという子がいましたね。途中で転校してしまっただんですが」

というとき、先生は暫く考えて

「ああ、よくおぼえていますね。ミヨちゃんていましたよ。可愛い子でした」といわれた。そして、先生は、この町を出ていつてからのミヨの消息はわからないという。父親の仕事の関係で転々としていたため、百まで数えることもできないし、「あいうえお」もかけなかったのだ、毎晩、家に呼んできて、特別に教え、やっと勉強も追いつきそうだったのに急にいなくなってしまったということなどをなつかしそうに話された。

町を出るときに、夜逃げのような形だったが先生のところにだけは、顔を出していったという。

私は松田ヨシエのことも思い出して話すと、先生に「なみちゃんは本当にいろんなことをおぼえているわね」といわれた。

あの、戦争が激しかったときは、どこで、すごしていたのだろうか。ミヨも、ヨシエも、それに、この同窓会に出席している友だち、それぞれが、大変な生活だったにちがいないと思った。

ふと、そんな思いにとらわれていると、同窓会の席上はビールがまわり、次第に賑やかになっていった。

座が賑やかになると、青い着物をきて、髪の毛を高々とセットして坐っているハマ子が中心

になっていた。ハマ子は、色が白く、目鼻だちがしっかりしているせいか、ひどく堂々とみえた。それにハマ子は男の人たちに人気があった。そして、数多くの民謡や歌を、実によく知っている。大漁節や花笠音頭を手拍子をつけて目を細めて歌う。

「ハマちゃんは、いい声をしてるね」

と、なみ子は幸子に話しかけると、

「そうなのよ。ハマちゃんは水商売してんだよ。今はよ、民謡酒場にいるんですよ」と教えてくれた。

そういわれてみると、いかにも素人でなく、プロらしい雰囲気を持っている。それにどっしりとした女親分的な堂々たる態度であった。

「民謡酒場って、どこにあるの」

「ほら、洋服屋があつたでしょう。その隣にこの頃、できたんですよ。だから、ハマちゃんは人気もんで景気がいいらしいですよ」

子どもの頃とちがって、幸子是他所ゆきの言葉で話した。

賑やかなハマ子は、男友だちにかこまれ、

「ハマちゃん、やい、ハマ子」

と呼び声がかかっている。

誰かが、「オーイ、ハマちゃんよ。ハマちゃんの苗字は何ていうんだよ」といった。

ハマ子は、気分よさそうにビールを飲んでいたが、「私はよ、今のが、三人目の亭主だからよ。苗字なんか忘れちゃっただよ」といったから、どっと笑い声がおきた。

ハマ子も苦勞したのだろう。だが、胸をはって、たくましく生きているのは嬉しかった。

ハマ子の隣に坐っている山本順子は色白できれいだった。子どものときから、数少ない洋服をきた生徒だったが、どこことなく、暗い感じであった。だが、将来、美人になるだろうという顔立ちをしていたが、現在、いかにも、あかぬけして着物を上手にきこなしている。

なみ子が、幸子に「山本さんは、若くてきれいなね」とささやくと、幸ちゃんは、声をひそめて、「いまは、旦那が病氣なんで、料理屋に勤めているんですって」といった。

なつかしい友だち同士は、あまり個別的に話をしない。

なんといっても、うちとけたのは、記念撮影をするときだった。近所の写真屋が呼ばれてきて、原田先生を中心にあらんだが、カメラをいじっていてなかなか写さない。

一応、黙ってならんでいたが、写真屋のカメラをみつめていると、その沈黙にたえきれないのか、照れくさいのか、仙六が、「おーい、写真屋、みんなすましてるんだからよ。いい男や女を写してくんせよ。早くしろよな」といった。土地っ子らしい若いカメラマンは、「おーうよ。若くとんべと思うから時間がかかるだよ。ちょっとまってせよ」と答えた。

なごやかな笑いのあと、シャッターがきられた。そのあと、みんな自由な話あいになり、原田先生が、みんなより、ひと足さきに帰られることになった。そこで、なみ子はハマ子、絹代、民子と先生